



2015「北の大地」—風の記憶—

大雪山縦走と道南の旅

【2015 年「北の大地」 行動軌跡】

表表紙 黄金原最上部よりオプタテシケ山

裏表紙 大沼よりトムラウシ山



7月2日(木)

自宅(16:00)ー南部・東部自動車道ー仙台港フェリーターミナル(16:30)(19:40)～
～太平洋フェリー「きたかみ」～ (25km)

フェリー料金が半額になる早割は、人気の「きそ」と「いしかり」はなかなか取れないが、「きたかみ」は何とか取れた。レストランの食事以外は「きたかみ」でも全く問題はないが、「きそ」、「いしかり」と比べると「きたかみ」の食事はかなり落ちる。同じ太平洋フェリーなのにどうしてこんなに違うのかと疑問に思う。乗船前にスーパーで買って、持ち込んだ方が良かった。以前は、レストランで食事をしながらワインを飲んで、これからの旅を想うことが楽しかったのだが、2000円の夕食のバイキングには、あまり食べたいと思うものがなく、気分がのらない。

今回は、バイク仲間の春日、関水さんと5周年記念のツーリングをしようと思っていたが、関水さんの病氣入院という予期せぬ事態のために5周年記念は延期ということになり、今回は単独の旅となった。

今回の旅でも、大雪山の縦走を計画しているが、今年のコースは不安だらけの登山だ。登山口までの林道にはゲートがあり、その鍵はナンバーキーではなく電子錠で、森林管理署に借りにいかなければならない。貸し出し個数が決まっているので、無い場合もあるし、役所仕事だから8時半以降でないと開かないのと、土日は休みだから、今回のように月曜日に登る計画を立てている場合は、金曜日に借りに行かなければならない。ということとは、明日、苫小牧に上陸したら、一気に旭川まで走り、街中で役所を捜さなければならない。電話で場所は確認しておいたが、バイクで探すのは一抹の不安があるし、苦労して訪ねても鍵があるかどうか心配だ。鍵が借りられない場合のコースも考えているが、今回の未知のルートはなんとしてでも歩きたいのだ。山中テント泊3泊以上の過酷なコースの縦走は、年齢を考えて今回は最後のチャンスと思っているからだ。

7月3日(金)

～苫小牧港フェリーターミナル(11:00)——D259——沼ノ端西IC——道央道——砂川SA
ー旭川鷹栖IC——R12—L90—L98—R237—上川森林管理署—R237—西神楽—D294—
D213—忠別ダム—D1116—D718—上俣真布林道—D718—D1116—D543—美瑛—
D966—青い池D966—D353—D298—富良野(18:00) ロッチ・アイガー (350km)

フェリーの進行方向左手に恵山と駒ヶ岳が、まるで大きな島のように洋上に浮かんでいるように見えた。それを見た隣のおばさん立ちの会話。「あら、大きな島が見える」、「あら、そうね」。北海道の地図を頭に描くことができる人は、こんな所に島が無いことくらい分かるはずだが、この人達もそんなことくらい分かっている、それとは別に、目に見える状景を優先的に感じ取るのだろうか。

今日は半日でかなり走らなければならない。北海道の大動脈の道央道を、旭川を目指して走ったが、風が強く苦労した。バイク走行で嫌なのは、雨と風と雷だ。幸いなことに、バイクのエンジンは調子が良く、Vツインの鼓動が頼もしく、心地よく体に伝わってくる。頭の中にあるカーナビを頼りに、森林管理署は意外と簡単に探すことができた。

事務所の一番前に座っていた女性に「上俵真布林道の鍵を借りたいのですが」と声をかけると、「この用紙で手続きをしてください」と紙を渡してくれた。ということは、鍵があるということなので一安心した。その後、電子錠なるものの使い方を教えてもらったが、その間、女性は自分の仕事を中断しなければならないのに、嫌な顔もせず丁寧に親切に教えてくれた。

その後、富良野のロッヂ・アイガーに行くついでに、忠別ダム上流の釣り場を下見し、林道の下見にも行ったが、最終部落を過ぎた途端、鬱蒼とした森の中に入り、熊が出そうな雰囲気になったので、バイクでは心細くなり途中で引き返した。そして、最近有名になってきた青池に行くことにした。今年の冬、真っ白な雪原の中の青池をイメージして写真を撮ろうと思ったら、青池とは灌漑用水路の人造湖で、冬は水が無いことがわかった。それ以来、興味はなくなったが、一度は見ておこうと行ってみた。満車の駐車場の端っこにバイクを止めて、カメラの準備をしていると、辺りから聞こえてくるのは日本語ではなく、半分以上は中国人で賑わっている。この日の青池はそんなに青くはなかった。白神山地の十二湖の青池とは比べようもないほどだった。

美瑛の丘を気の向くまま走り回りながら富良野に向かったが、この辺りは冬も含めて走り慣れている所だ。ロッヂ・アイガーには明るいうちに着くことができた。いつものことだが、ここに着くと自分の家に着いたような安堵感に包まれる。アイガーでは、今年から次男がインターネット予約を導入したため、予約が続き忙しいようだ。しかも、ほとんどが東南アジア系の外国人が多い。今晚も自分以外は外国人の客である。



青池



グリーンピース畑

7月4日(土)

ロッヂ・アイガー……ふらのや……ロッヂ・アイガー

ロッヂ・アイガー

(0km)

今日は、あらかじめ送っていた登山道具をザックにパッキングしなければならない。15kgを限度に準備を進めたが、3泊4日の食料と予備食は絶対必要だし、テントと炊事道具も必携だし、なかなか軽量化は難しい。あつたらしいだろうと思われるような物は全て割愛した結果、水とカメラを除いて13kgに抑えた。勿論、去年の反省から、少々重くはなるがサルナシ酒は多めに用意をした。これでも水とカメラを加えれば16kgになるが、このくらいであれば、写真を撮る時にザックを下ろさずに済むし、歩きやすい。

お昼は「ふらのや」のカレーを食べに歩いて出かけた。「ふらのや」に着くと、運良く一巡目のラストで席に座ることができた。今までの割安のランチがメニューから消え、実質的に値上げをしているのだが、スープカレーは相変わらず旨い。自分が食べ終わる頃には、店の外まで長蛇の列ができていた。

ロッヂ・アイガーからは、十勝岳連峰、トムラウシ山、旭岳まで一望できるのだが、今日も山は雲の中だ。しかし、天気予報によると、明日は雨だが6日以降はしばらく天気が安定するというので、予定通り6日に登山開始にすることにした。

7月5日(月)

ロッヂ・アイガー―(バス)―旭川―(バス)―旭岳温泉

ユースホステル白樺荘

6日の行程は南沼CSまで行く予定なので、6日の早朝に出発しないと厳しい。そのためには、5日に登山口の近くまで行く必要がある。俵真布登山口から一番近い宿の旭岳温泉のユースホステル白樺荘に入り、車の手配をした。この白樺荘は温泉で、食事もあるので人気があり、特に欧米の人達で賑わう。同じエリアの層雲峡ユースホステルも外国人の利用が多いが、中国人が多い。ここのユースには中国人はほとんどいない。ハッキリと遊びの嗜好がちがうのである。ここに泊まる人達は登山トレッキングをとことん楽しもうと考える長期滞在体験型だが、中国人達はあまり時間をかけないで、名所を眺めるだけの観光型である。

7月6日(月)

白樺荘(5:00)―上俵真布登山口(5:40)(6:00)―扇沼山(1615m)(9:50)
―三川台(13:15)―南沼C・S(16:20)

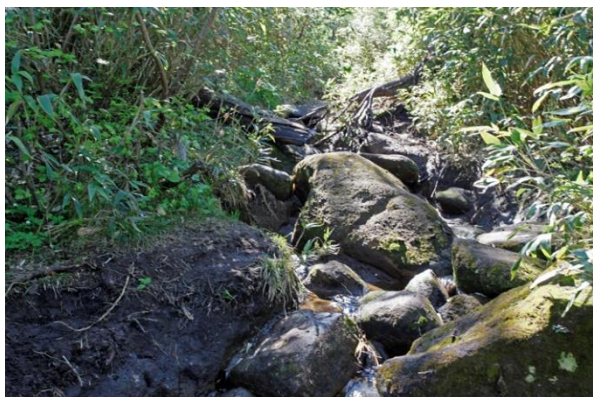
南沼C. S

【未知の縦走ルートを開始】

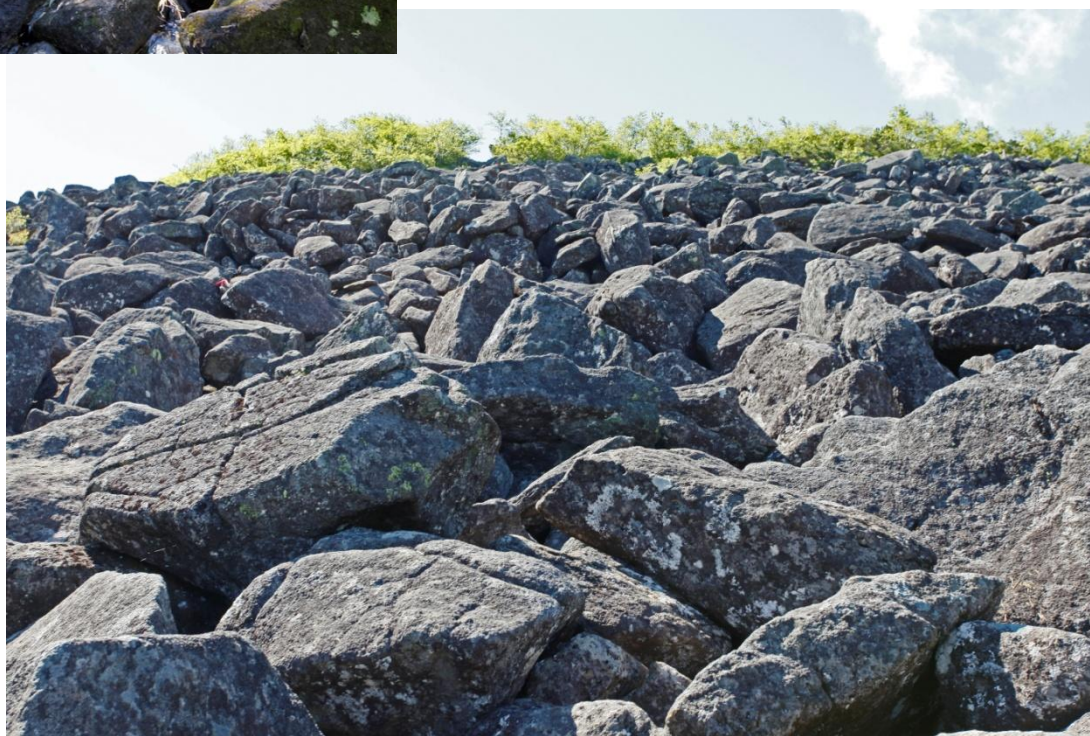
上俵真布登山口は、廃道になった林道のダラダラ歩きから始まったが、そのうち沢歩きをしているような泥濘と大きな石の登山道に変わっていた。しかし、登山口をはじめ、途中の分かれ道にも標識は全く無い。森林帯の長いダラダラ歩きを終え、視界が開けると、累々とした巨岩帯が現れた。ロックガーデンである。こんなところでガスに巻かれたらルート確保はかなり難しい。今日は晴れているので、残雪の縞模様が清々しい旭岳を横目に登ることができるし、美瑛、富良野方面の広大な広がりを見せる下界を眺めながら、ロックガーデンの大岩の上で休憩するのも気持ちが良い。ポポー、ポポーと聞いたことのない鳥の鳴き声がコダマしてくる。

ロックガーデンを過ぎて、急斜面を突き詰めると扇沼山の山頂に出た。ここからの眺めは、旭岳からトムラウシ山、そして、十勝岳連峰と続くが、オプタテシケ山の標高差600mの登山者泣かせの急斜面は、眺めるだけでも迫力がある。ここからしばらくは展望のきいた爽快な尾根歩きが続く。この日初めての登山者と出会った。昨夜は南沼C・Sに泊まり、俵真布に下山すると言っていた。特異な景観の兜岩が眼前に近づき、今度はひたすら沢へと降りる。今まで登ってきたのが勿体ない気がする。この沢水を沸かして昼食にしたが、写真を撮りながらにしてもペースが遅すぎた。ここから三川台までは登りが続くのだが、少しペースをあげることにした。三川台は新得方面のユウトムラウシ川、美瑛方面の美瑛川、旭川方面のクアンナイ川の源流の起点になっており、大雪山系の三大高原の一つ、黄金ヶ原に続いている。トムラウシが一気に近づいてきた。左手には旭岳、右手には十勝岳連峰、富良野、美瑛の穀倉地帯と続き、北海道の広さを実感できる。最近、ここにテントを張る登山者が出てきたらしいが、その気持ちは良くわかる。しかし、遮る物がない風衝地帯だから、ひとたび嵐になったら命に関わる事態になることと、水場がないことでキャンプ指定地にはなっていない。ザックを置いて、ユウトムラウシ川方面のカール状地形を見に行ったら、熊の糞を踏んづけそうになり、慌てて周りを見渡した。U字型の絶壁の下には大小の池が点在し、熊の絶好の住処になっている。突然、エゾシカ二頭が何かに怯えたように走り出し、池の反対側の茂みに消えた。三川台からのすばらしい景観の稜線歩きは疲れを感じさせないが、体には確実に疲労が蓄

積まれてきていた。ハクサンイチゲの群落を撮影していると、この日二人目の登山者が近づいてきた。今日は三川台にテントを張り、富良野岳まで行くと言っていた。「オプタテシケに登るんですか」と羨ましそうに言うと、「それが問題だ」と言うわりには平気な顔をしている。南沼C・Sは近いようでなかなか届かない。ザックが肩にずしりと食い込んで、最後の急登は体に応え、ここを登り切ったらC・Sが見えて欲しいと願った。しかし、登り切っても見えなかったが、なだらかな起伏の先に南沼C・Sはあった。7 張りほどあったが、何とか良さそうな場所を確保することができた。テントの設営が終わったら、急に空が暗くなり、ガスが辺りを覆い始めた。テントの上手が、雨が降った場合い心配なので、トイレ用のスコップで溝掘りをした。到着があと少し遅かったら大変だった。寒くなったので、体だけテントの中にして外で炊事を始めた。夕食は天然プリの照り焼き、ワンタン、ビーフシチューを、今日の天気恵まれた登山に感謝し、サルナシ酒を飲みながらいただいた。サルナシ酒が体中に染みわたり、体内の疲労物質を取り去っていくのがわかるように体が熱くなってきた。そして、充実感に満たされながら寝袋に入ると、心地よい眠気に襲われた。ウトウトした頃、フライシートに雨の音が当たり始め、瞬間に本降りになってきた。フライシートは完全だし、溝掘りもしたし、ペグには大きな石を載せて固定したから安心だが、明日の天気が心配になってきた。登る前の予報では曇り時々雨だったが、ラジオの天気予報は雨になった。余裕のある行程で計画しているので、雨だったらここから動かないことにしようと思った。雨の中を歩いてもおもしろくない。それでも、沼ノ原へは下山できる。今日の歩きで、体にはかなりのダメージがあるようだ。そろそろ本格的な縦走は無理かなと感じ始めた。



上俵真布登山口近くの登山道 沢のように水が流れている



ロックガーデン



扇沼山より、オプタテシケ山と硫黄沼



兜岩 後方中央がトムラウシ山



滑落したら、と思うとびびる雪溪のトラバース



三川台からのトムラウシ山 南沼のテン場まであと3時間弱



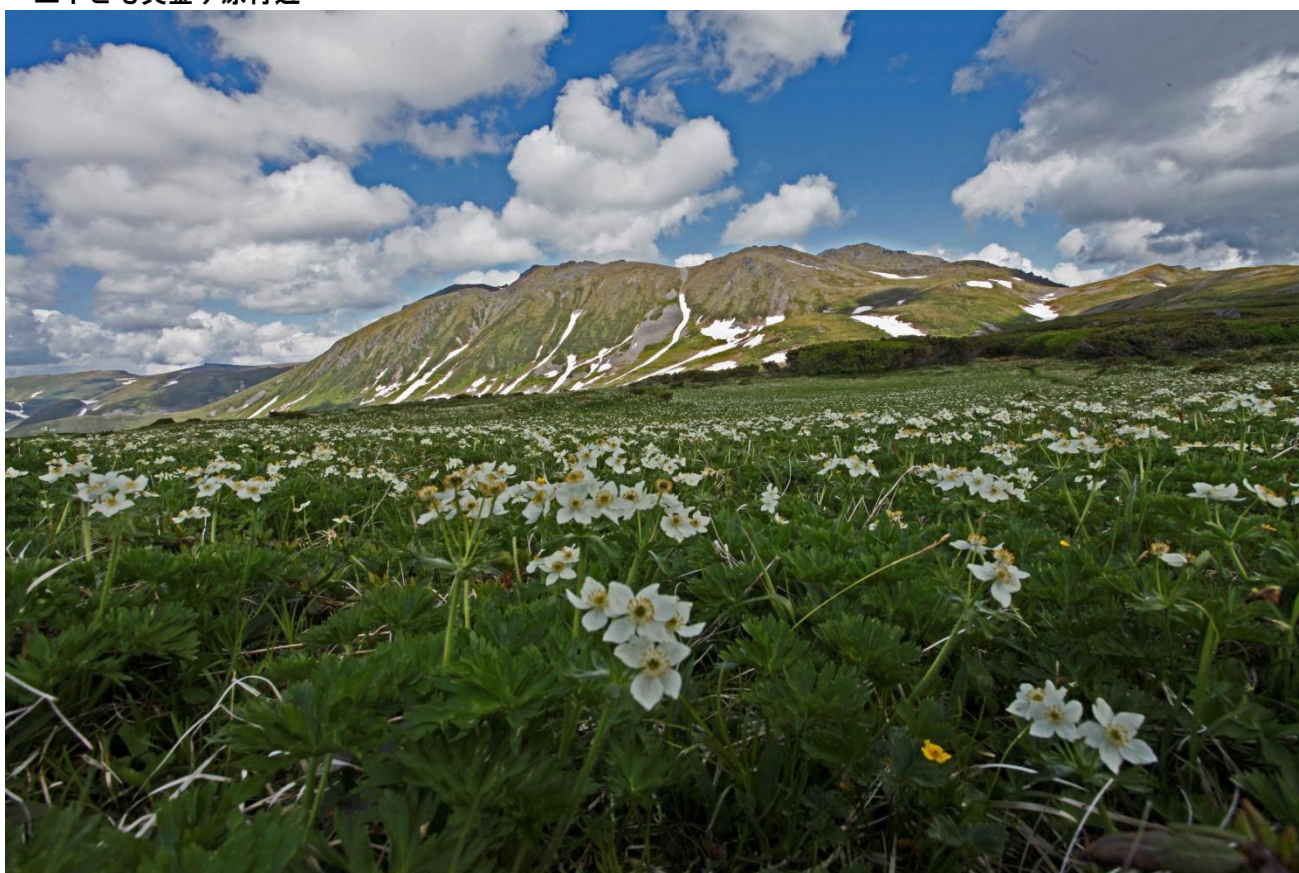
三川台分岐と熊の糞



三川台のカル地形 後方はトムラウシ山



上下とも黄金ヶ原付近





遠方に十勝岳連峰を望む



遠方はオプタテシケ山



南沼とキバナシャクナゲ



南沼 C・S

7月7日(火)

終日 南沼C-S

南沼C-S

【局地的爆弾低気圧】

タベからの嵐は、朝になっても相変わらずだった。テントを少し開けて外を見ると、厚いガスに覆われ、10m先の地面しか見えない。今日は動き回らずというか、動けないので、この場に待機することにした。ラジオの予報では、明日は回復するというので、それを信じるしかない。しかし、風雨ともに一向に弱まる気配はない。それどころか、むしろ強くなってきた。フライシートを張っていても、強風のためにどこからともなく水は入ってくる。フライシートの換気口を閉じるのを忘れていたのも一因だった。このフライシートは地面まで覆っていないので、このような強風では下からの吹き込みによりグランドシートを濡らしてくる。

【曇 1 枚の世界での生活】

朝食のため、お湯を沸かそうとしたが火がつかない。テントとフライシートの間に、ボンベにバーナーを付けたまま置いていたら、キャブレターに水滴がついてしまったようだ。キャブレターをバラして拭けるところは拭き、更にライターで加熱して水分を取ることにした。時間をおいて再度点火したら、水分が抜けたところから徐々に火がつき始めたのでホッとした。しかし、曇 1 枚の広さで、しかも直立できない空間で一日を過ごさなければならなかったが、未だかつて無い体験となった。普段、ラジオは天気予報以外に聞くことはないが、今日はほぼつけっぱなしだ。山の嵐は波状攻撃で来る。テント内が急に暗くなったと思ったら、大粒の雨がフライシートを叩きつける。体温を奪われないようにインナーダウンを 2 枚重ね着して、更にゴアテックスのレインウエアも着込んだ。このテン場は標高1950m、気圧は790phi。テントの外はかなり気温も下がっている。テン場に残っているのは 3 張りだけのようだ。今朝、下った人達は途中で大変な思いをしていると思う。昨日、三川台にテントを張ると言っていた人は大丈夫だろうか。ここのテン場は条件が良いが、三川台は完全な吹きさらしだから、ものすごい風に見舞われていると思う。自分も来るとき、疲れたのと景色が最高なので、南沼まで行かないでテントを張ろうかなと思ったが、もしも張っていたらとんでもないことになっていたかも知れない。

10 年前、トムラウシ山に初めて登った。その時はトムラウシ温泉からの日帰り登山だった。その時、頂上で会った人が、忠別岳のほうから縦走してきたと話していたのを聞いて、自分はそんなことはできないだろうと羨ましく聞いていたが、その後、縦走の魅力にはまり、10 年後の今年、まだ一般的でない俵真布からの縦走を試みている。昨日は最高の天気だったのに、今日は嵐。こんな大自然のまっただ中の過酷な条件の中で、どのように判断し、どのように行動すればよいかを試されているようなものだ。人里離れた場所が場所だけに、このような嵐の中では言いしれぬ不安との戦いであるが、テントの設営を十分にすることで不安は半減する。隣のカップルもラジオを聞いて気を紛らわしているようだ。テント内が少し明るくなると、心理的に落ち着いてくるが、それも束の間だ。こんな時はコーヒーでも飲んで落ち着こうと、お湯を湧かした。テント内で火気を使用するのは危険だが、外ではとてもじゃないができないので、テントを少しだけ開けて換気に注意した。しかし、少しの隙間から強風が入り込んでテントに引火しそうになるので、バーナーのつまみを常に握っていないと不行き届きだ。強風は止む気配はなく、テントが潰されそうになるくらい大きく歪む。グランドシートが強風で浮き上がり、置いてある食べ物とか水の容器がひっくり返された。何もすることがないので、日記を書くことと、食べることとサルナシ酒を飲むことしかない。これでは、登山で減量の予定が、逆に太ることになる。相変わらず風雨が激しく、気温もかなり下がっ

て 3℃くらいと思われる。トイレにも行けないが、携帯トイレはこんな時にも役に立つ。しかし、単独だからよいものの、複数だったら難しい問題だ。夕方 5 時頃になって、ようやく 1hPa 上がった。強風によるテントのバタバタ音を一日中聞かされているだけで頭が痛くなるが、サルナシ酒を飲んで、気を紛らわすしかない。そして、楽しみは食べることだが、今晚のメニューはサバの味噌煮と牛飯とフカヒレスープだ。昨日のブリと今晚のサバといい、魚好きにとっては少々重くなっても、テントの楽しみとして持って行きたいものだ。普段、家で食べたらあまりおいしいと思わないかも知れないが、ここで食べるブリ、サバは、ともに格別においしいし、サルナシ酒も高級ブランディーになる。終日テントに滞在したため、朝からサルナシ酒を飲むことになり、明日の残り分が心配になってきたので、加減して飲まないといけない。もしも、サルナシ酒がなかったならば、自分の山行きは味気ないものとなったであろう。サルナシ酒の力は本当に大きい。単に旨いだけでなく、気持ちを豊にしておかつ、元気の源になると思い込んでいるのである。

ここは携帯が通じるので、アイガーの佐藤さんに電話をして、ネットで天気概況と今後の予報を教えてもらったが、明日は晴れる予定ということなので、安心して寝ることにした。外は相変わらず荒れまくっているし、気温も 0℃近くになったようで、鼻のてっぺんが冷え、つま先がかじかんできたので、寝袋の上からエマージェンシーシートで包んで保温に努めた。



嵐のテント内 夕食時



エマージェンシーシートを活用

7月8日(水)

南沼 C・S(4:40)・・・トムラウシ山(2141.2m)(5:15)(6:30)・・・南沼 C・S(8:50)・・・北沼
・・・化雲岳(1954.5m)・・・五色岳(1868m)・・・忠別岳 C・S (15:00)

忠別岳C. S

頂上アタック中

朝日を浴びた自分の影



トムラウシ頂上より旭岳方面を望む



トムラウシ山頂上



影トムラウシ 後方は十勝岳連峰と雲海

【快晴のトムラウシ山】

まんじりとしないうち夜が明けると、外は異様に静かになっていた。少しテントを開けてみると、まだ日陰で暗いテン場の彼方の山並みが、朝日を浴びて金色に輝き、空の青は何処までも青かった。急いでカメラと水とおやつを持って頂上に急いだ。なんと、水たまりはパリンパリンに凍っており、濡れた石の上は凍ってツルツルになっていた。氷点下になっていたのだ。頂上直下の崖は両手を使って登り切ると、残雪模様の眩しいくらいの大雪連峰が突然目に飛び込んできた。4度目のトムラウシだが、こんな息の詰まるような迫力のある景観は初めてだ。無風快晴の頂上を独占し、写真を撮り放題に撮って、影トムラウシまで見る事ができた。頂上で1時間程楽しみ、下山しようと思ったら若い男が登ってきた。何と、あの嵐の中を二つ池から南沼まで来たらしい。話しによると、南沼あたりで体が震えだし、死にそうになりながらテントの中に転がり込み、お湯とコーヒーを飲んで生き返ったと言っていた。彼は若く体力があったから良かったが、どうしてあんな嵐の中を歩くのか理解できない。三川台にテントが無かったかと聞くと、一張りあったと言っていたが、やはり、動かないで待機していたのだ。賢明な判断をしたのだ。彼はザックを背負って登ってきたので、そのまま北沼の方に下りていった。去りがたい頂上を去る時、もうトムラウシ山には来ることは無いだろうと思うと、特別の感慨が込み上げてくるものがあった。寂しいことだが、いつまでも出来るわけでは無い限界を認識しなければならない。

【局地的爆弾低気圧による遭難発生】

テン場に戻ってからゆっくりと朝食を食べ、雨で濡れたテントも乾いたので手際良く撤収した。北沼方面に向かって歩き始めたら、ヘリが上空を旋回し、ホバーリングしたと思ったら飛び去った。昨日の嵐で遭難者が出たのかも知れないと思った。北沼周辺は雪が多い。去年、エゾコザクラが群生していた湖畔は雪に覆われていた。トムラウシの頂上直下にこんな大きな沼があることは不思議でならない。恐らく、北海道では標高が一番高い沼だと思う。青く澄んだ湖面を取り囲むように白い雪渓が沼に押し寄せて湖面に消える。しかし、天候が悪化すると、ここは地獄の様相となり、今までに幾多の命を奪ってきたところでもある。まだ記憶に新しい数年前のトムラウシ大量遭難はこの北沼で起こった。





北沼 昨年、手前の雪溪の下はエゾコザクラのお花畑だった



北沼とトムラウシ山



ロックガーデン（手前急斜面のため見えない）から旭岳方面



ロックガーデン上空を飛ぶ捜索ヘリ

ロックガーデンの下りは、晴れていてもルートを見失いやすい。実際、正規のルートから外れた所を下りて、途中で気づき、本来のルートへ戻った。ガスった場合、登りより下りがわかりにくくなるだろう。日本庭園は本来のあるべきチングルマをはじめとした花がほとんど無く、興ざめだった。ここで、ひさご沼から登ってきた4人組の登山者に、遭難者のことを聞かされた。先ほどの赤いヘリは遺体収容のヘリで、ロックガーデンで頭上を巡回していたのは、他の遭難者の捜索だった。山小屋の人達は、この天気では危険だからと止めたいが、無理して行つたと話していた。話しの内容から、遭難者を発見したのは、自分とトムラウシの頂上で別れた青年だった。自分はテントに戻ってから朝食をとり、ユックリと9時前に出発したが、いつものように6時頃出発していたら、北沼で遭難者と遭遇する羽目になっていた。死因は凍死ということらしいが、昨夜の氷点下の冷え込みに耐えられなかったようだ。トムラウシ頂上で会った青年は、同じ嵐の中を行動しても体力があったのか、からくもテントを設営して助かったが、どうしてあんな嵐の中を行動しようとしたのか、残念でならない。

【あの可憐な花々はどこへ】

ひさご沼分岐から、化雲岳への登りは長い下りの後だけに辛い。日差しは強いが、吹く風の爽やかさに助けられた。しかし、期待していた化雲平のお花畑は、昨年、一面に敷き詰めたような花々が幻だったように一輪の花も見当たらない。今年の大雪山の花は異常な現象だ。去年は少し盛りが過ぎていたので、今年は一週間早めて登ったのだが、時期の問題ではなく、最近の異常気象の影響なのか、花芽が着いていないのである。この十数年の北海道の旅の経験だけでも、天候の変化は明らかに感じとれる。以前は、北海道の7月上旬の天気は安定した日が長く続いていたが、最近はめまぐるしく変化するようになった。ロッジ・アイガーでも、6月なのに30度を超える暑さになったかと思うと、翌日はストーブを焚かなければならないほどの冷え込みになるなど、おかしい天気だと話していた。そんな影響を受けて、畑作農家は農作物管理が大変なようだ。

大雪山系の中で、化雲岳とトムラウシ山は確実に携帯のエリアになるので、この天気からして、明日の沼ノ原への下山は予定通り可能と判断し、下山口までの車の手配をしておいた。昨年と同じアングルで記念写真を撮っていると、天人峡のコースから一人の中年の男が登ってきた。なんと、この男の食事は一日一回で、登山中も水も食料もほとんど持たなくても済むと言っていた。今日の朝に登り始めて、化雲岳頂上までおよそ10時間の歩行の間、口にしたのはウイダーの三分の一だけと言っていた。普段の生活においても食事は一日1回野菜を中心に、肉、魚も食べないそうだ。ただし、必ずビールだけは飲むとも言っていた。以前、雑誌で同じような人間の記事を読んだことがあるが、実際に会ったのは初めてだと言うと、「その人間だ」と平然と話していた。体型は長身痩せ型で頑強そのものという印象だった。登山には便利な体質かも知れないが、この人は食べる楽しみというのを知らないのではないだろうか、と余計なことを考えながら別れた。ここから忠別岳テントサイトまでは、まさに「神々の遊ぶ庭」の中をのんびりと歩くことが出来る。ウルップソウが花盛りということは、他の高山植物はこれから花盛りなのだが、蕾みを付けていない。

忠別岳C. SIには先客2張りがあった。単独行の中年の男は、裏旭のテン場と昨日の白雲でのテン場で、ともに嵐にあい、テントが飛ばされないかと心配で眠れなかったと同じようなことを言っていた。白雲では、テントのポールが折れて、すぐそばの避難小屋に逃げ込んだ人もいたそうだが、昨日の南沼テン場は避難小屋もないので、テントの破壊は命に関わることになる。

足の踏み場もないほどの高根ヶ原のコマクサや忠別岳のチングルマの大群落は全く見当たらなかったと驚いていた。これから行く人には悪いと思いながらも、化雲平のお花畑も全くないと言ったら、異常現象だと嘆いていた。



化雲平の池塘 遠景は石狩連峰（左）とニペソツ山



化雲岳より旭岳方面



化雲岳よりトムラウシ山



化雲岳頂上



エゾコザクラとトムラウシ山



大雪溪 晴れていれば爽やかで気持ち良いが、濃霧の時はお手上げ



ウルップソウの群落

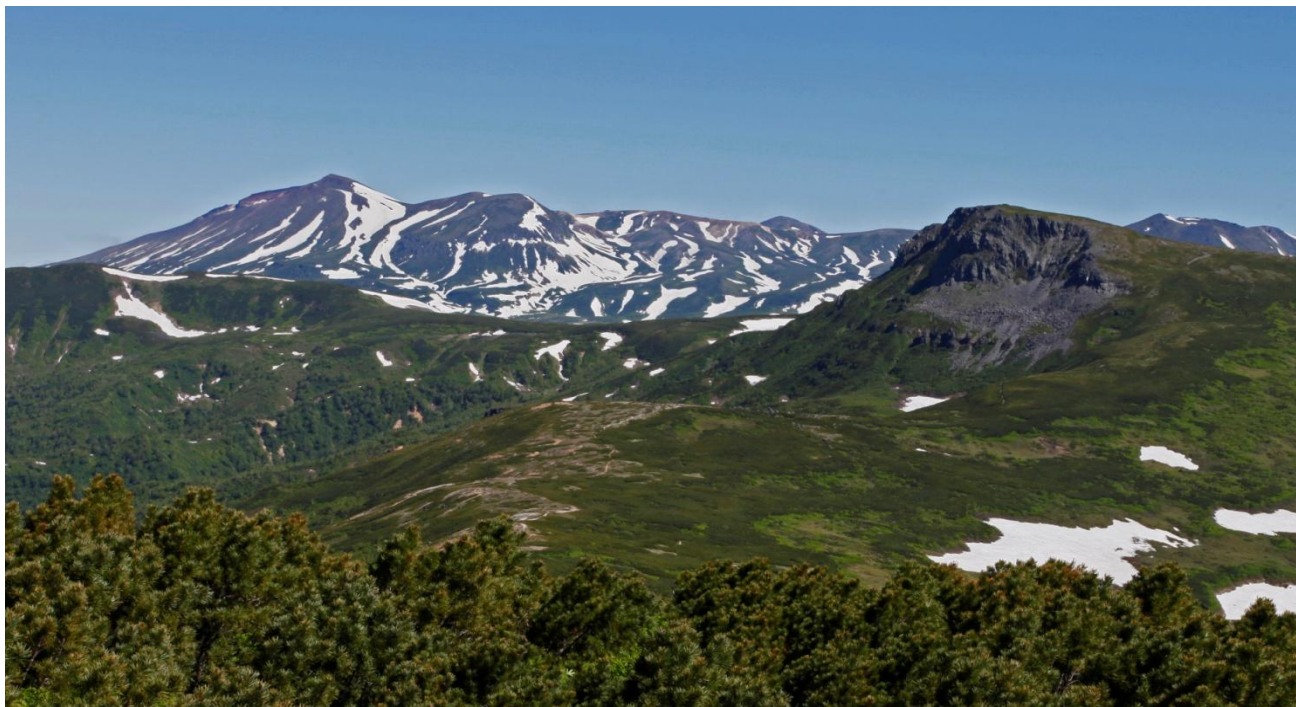


忠別岳 C・S 今晚は3張りだけ

7月9日(木)

忠別岳C. S(7:00)・・五色岳(1868m)・・五色ヶ原・・沼ノ原・大沼(13:30)(14:00)・・
クチャンベツ沼ノ原登山口(16:20)——層雲峡温泉

層雲峡Y・H



五色岳頂上からの展望 上は旭岳、下はトムラウシ山





五色ヶ原でコーヒーブレイク



五色ヶ原のキバナシャクナゲと石狩岳・ニペソツ山



五色ヶ原の最下部

エゾツガザクラとチングルマ

下はエゾコザクラ





沼ノ原の大沼とトムラウシ山





大沼と石狩岳

今日も快晴だ。テントに泊まった時の朝はのんびりしたいが、次のテン場までのことを考えると、早く出発した方がよいのだが、今日は下山するだけなので、ユックリと朝食を食べてテント生活を満喫した。心地よい疲労感はあるが、筋肉痛も腰痛もなく、体調はすこぶる良い。沼ノ原登山口への下山を考えたら、忠別岳C、Sへテントを張るのはコースを戻ることになり、時間的には無駄になるが、混雑が予想されるひさご沼にはテントを張りたくなかったのだ。忠別岳C、Sは狭いが静かで気持ちの良いテン場だ。五色岳への登り返しも、最近ハイマツを徹底的に切り開いて歩きやすく整備されたので苦にならない。五色岳は標高のわりには展望がすこぶる良い。大雪連峰主峰旭岳が朝日に眩しく、トムラウシ山、石狩岳、ニペソツ山が間近に望むことができる。忠別岳C、Sで一緒だったもう一張りの夫婦は、自分よりかなり早く出発したのに、あまりの眺望に見とれてまだ五色岳で休憩していた。テン場でもそうだったが、非常に感じの良い夫婦で、しばし話し込んだ。今日は南沼C・Sにテントを張ると言っていたが、この天気だから最高の山行となることだろう。

ここから下山口までは下るだけだから楽勝と思い、沼ノ原も眼下に望まれるし、あまり早く着いてもと道草をしながら、五色ヶ原を蒼風に吹かれるまま、石狩岳とニペソツ山を真正面に眺めながら下山した。以前登ったニペソツも良い山だが、未だ登ったことのない石狩岳は陰しく切り立って格好の良い魅力的な山だ。登頂意欲をそそる山だが、現在の自分の登山レベルではかなりの困難が予想されるので、恐らく登ることはないであろう。期待していた五色ヶ原のお花畑は、ほとんど花はなく、蕾もない。今年の大雪山のお花畑は大ハズレだ。そんな中で、黄金ヶ原のハクサンイチゲの大群落を見ることができたのは幸運だった。これで大雪山の三大高原を全て踏破したことになるが、やはり高根ヶ原の圧倒的空間の広がりとお花畑の組み合わせは最高だ。

何処までも平坦な歩きは続かないとは思っていたが、いきなりの急降下の泥濘だらけの登山道になった。そして、近くに見えたと思っていた沼ノ原はなかなか近づかない。楽勝モードの見通しは甘かった。大沼のC・Sに着いたのは予定を1時間半オーバーの13時半。本来の山行計画では、最終日のテン場はこの予定だった。トムラウシ山を大沼越しに眺めることができるし、水もすぐ目の前にあり、静かで気持ちの良い場所だが、気になる看板がある。「最近、ヒグマの接近が頻繁に見られるので、注意！」と書いてある。そのためか、人の気配はまるでなし。もし、暗くなったら一人だったら少々怖い感じがする。しかし、今は明るい陽光のもと、残雪に輝くトムラウシを眺めながら、大沼のオタマジャクシが泳いでいる水を沸かし、お昼のラーメンをおいしく食べた。さざ波がたっていないければ逆さトムラウシが見られたのだが、そこまで望むのは贅沢というものだ。ここから下山口までは2時間もかからないから、もう楽勝と思ったが、これも甘かった。沼ノ原の木道を、間近に迫った石狩岳に魅力を感じながら歩いているうちはよかったが、大石と木の根が入り乱れた廃道のような急坂を下りるのは、登る方がマシだと思えるほどだった。疲れ切った下半身に、ザックの重みと全体重がプラスされて、身長分くらいの落差を一気に降りて着地したときの負荷は数倍にもなる。川を渡ることになっているが、その川は遥か下で瀬音もまだ届かない。ようやく川に出たと思ったら、地図に書いてある一本橋など見当たらない。落ち着いて周りを見渡すと、対岸にピンクのテープを見つけることができた。一本橋は流失したようなので、川の中の歩けるような所を選んで渡った。すこし増水しただけで徒渉は困難になる。このコースは人気のコースらしいが、ネットの登山記録に書いてあるように、楽に登れると思ったら大間違いだ。手配しておいた車が待っていた。予定より1時間遅れの到着だった。層雲峡Y・Hに着くやいなや、久しぶりに温泉に入り、疲れと垢を流し、3泊4日の縦走をやり遂げた達成感に酔いしれた。圏外にいた時の着信履歴を見て、発信元に電話をしたら、トムラウシの遭難が全国版で放送され心配したと言っていた。しかも、宮城の人らしい。以前は下山すると軽い脱水症状に見舞われ、ポカリなどのスポーツドリンクを立て続けに3本ほど飲んだりしたが、最近はすぐにでもビールなどの酒を飲むことができる。登山計画に余裕を持たせた結果と思われる。



写真では落差が分からないが、1 m以上の落差の連続の急勾配の登山道

7月10日(金)

層雲峡Y・Hー(バス)ー旭川駅ー(電車)ー富良野駅ーロッジ・アイガー

ロッジ・アイガー

【新店舗の「雑」】

旭川から電車に乗ったが、毎年のことながら車内は中国人で溢れており、日本語はほとんど聞かれない。相変わらず乗車マナーはすこぶる悪い。食べ物のゴミへの無頓着には呆れる。全員が悪いわけではなく、希に日本人が恥ずかしくなるほどのきれい好きもいるにはいるが、大部分はそうではない。こんな連中に注意しても、例の大きすぎる声で速射砲のように反撃してくるのが目に見えているので、充実した登山の後に不愉快な思いはしたくないので、悔しいが見て見ぬふりをすることにした。

富良野駅前の釣具屋に行って、ドバミズを買おうと思ったら、品切れだった。忠別ダム上流での大物釣りにドバミズが良いので、アイガーの庭でミズ掘りをしたが、暑さに弱いミズは時期的に小さいドバミズしかいなかった。前日の新聞を見たら、トムラウシの遭難者は宮城県の大田町の単独登山者だった。

夜は、「雑」の新しい店に行ってみた。前の店と比べるとかなりの広さだ。店が変わってもキープしていたサソリ印の麦焼酎のボトルは取ってあった。「雑」では、このサソリの焼酎だけを飲み続け、既に相当の本数になっていると思う。焼酎をロックで飲むときの器は、自作の湯飲みを置かせてもらっていたが、店が変わっても湯飲みを用意してくれていた。ママの友紀さんが作る酒の肴は相変わらず旨い。前からいたチホと3人で飲み交わすうちに、登山の疲れも手伝い、酔いが回り過ぎた。

7月11日(土)

ロッジ・アイガーーR237ー美瑛ー忠別ダムー上富良野ー富良野

ロッジ・アイガー

(150km)

忠別ダムの流れ込みには、橋のもとにバイクを置き、工事用の閉鎖中の道路を利用して30分ほど忠別川を下った。4時を回っても日差しは強く、河原歩きは汗をかいだ。しかし、苦勞して目的の釣り場に到着したが、去年とは全く違う流れ込みになっており、浅すぎて釣りにならない。餌釣りは止めてフライで釣ることにした。幸い、流れの中で魚のライズが見られる。この釣り場は周りに障害物が無いので、フライ初心者でも安心して振れる。ライズした辺りにフライを振り込むとバシャと反応があり、軽くあわせると手応えがあったが、明らかに小物の引きである。その後、何度か釣れたが、唐揚げサイズの小物ばかり。写真を撮って、魚を傷めないように鉤だけ持って放流した。夕方になれば大物が来るかと思ったが、全くダメだった。おかげでフライは少し飛ぶようになったのが収穫だった。

夜はアイガーの佐藤さんがイカめしを作ってくれたので皆で食べたが、おいしいイカめしだった。今晚の客はシンガポールと中国。最近のアイガーは国際色豊かだ。

アイガーにもう一泊する予定だったが、天気予報を見ているうちに明日出発することにした。しかも、道北は天気の悪い日が続くようなので、道北道東は諦めて、比較的天気が良さそうな道南を久しぶりに回ることにした。

昨年、泊まった積丹の宿に予約を入れたが、満室だった。その宿の近くにユースホステルがあったのを思い出したので、そこを予約した。

新しい店になった「雛」



愛飲の焼酎と自作湯飲み



忠別ダムでのフライフィッシング



7月12日(日)

ロッヂ・アイガー—D955—国分農園—D955—R38—滝川—R451—D28
—D11(厚田山道)—R231—石狩市—R337—銭函—R5—小樽—R5—余市—R229
—D913—積丹岬—D913—R229—余別 積丹Y・H (281km)



「北の大地」のベースキャンプ ロッジ・アイガー



国分農園でおいしいメロンをご馳走になる



積丹岬



積丹 Y・H



【道南の旅へ出発】

毎年、北海道の旅のベースキャンプにしているロッジ・アイガーにお別れをして、今日の目的地の積丹半島に向かった。今日一日は天気も持つようだ。その前に、今回参加出来なかった二人のバイク仲間にメロンを送るために国分農園に寄った。一年ぶりの国分さんは、メロンの収穫作業に追われて忙しい中だったが、おいしい富良野メロンをご馳走してくれた。「雛」に行く前に連絡してくれたら行ったのと言われたが、今度また一緒に飲みたいものだ。また、富良野まで戻り、滝川を目指して走った。そして、懐かしいR451から当別町へ抜けるD28に入ったが、数年前の寂しい細い道路が改良され、交通量が増えている。厚田山道越えも、以前はほとんど車と行き交うこともなかったのに、数台とすれ違った。石狩市のコンビニでお昼を食べたが、日曜日のせいか、ライダーが多く、同じようにコンビニで昼食をとっている。ただ、このコンビニには日陰の場所が無く、仕方がないので、バイクのシートに跨がって食べた。去年行かなかった積丹岬で1時間ほど歩いたが、神威岬ほどの感激はなかった。それでも観光客は多く、バイクを止めるスペースを確保するのに苦労したほどだから、車の人は空くのを待っている有様だった。

積丹Y・Hは迷うことなく到着することができた。先客のバイクが2台玄関先に止めてあった。部屋もその二人と相部屋だった。どうやら今晚の客は3人だけのようだ。夕食も3人で、お互い酒好きのために話しは盛り上がった。それにしても、このユースは大当たりだ。オプションで生ウニと焼きウニも頼んだが、とにかく安い。このユースの息子がウニ漁をしているとは言え、ユースの食事とは思えないほどの豪華さだ。ホッケのフライとタコの頭の煮付けも美味しかった。

何と奇遇なことに、安田さんと名乗る東京から来た62歳のハーレーの人は、明後日にロッヂ・アイガーに予約を入れていたのである。すぐにアイガーに電話をして、こういう人と今飲んでいよと報告をした。ヤマハに乗っている本田さんは川口の人で、普段はトライアルを専門にしている、競技にも出場している65歳の人だ。しきりに電話をしているその内容から、転倒したときにクラッチレバーを折ったようだ。ところが、部品が小樽でも手に入らず、結局札幌まで行くことになったようだが、そのことも含めて旅を楽しんでいるような羨ましい人間だった。

7月13日(月)

積丹Y・H—R229—泊村—岩内町—R229—寿都町—弁慶岬—R229—島牧村
島牧Y・H (224km)

ペアレントの息子のウニ漁師

茶色っぽいウニは高級バフンウニ



ウニ殻剥き体験



寿都海岸で和洋折衷の漁場建築が美しい



島牧ユースの夕食 最近のユースの食事は十分過ぎる 生ウニがこんなに入っている

【ウニ殻剥き体験】

このユースでは、宿泊者にウニの殻剥き作業の体験をさせてくれるという。朝食後、ウニを獲った船が着いたので、裏の作業場に行った。このユースの息子がすでに剥き方を始めていた。ユースのペアレントのお母さんがウニのことの基本的なことを教えてくれた。「岩の上にいるウニはおいしくなく、昆布の中にいるウニは、大好物の昆布をたらふく食べているので美味しい」と言っていた。この漁協では、大きさと収穫量の制限を厳しく行っていて、全て天然の上質ウニを収穫しているそうだ。剥いたばかりのウニを口の中に入れると、海水の塩味が効いた濃厚なウニの味と香りが口の中に広がり、いつまでも残った。このウニはミョウバンなどは一切使わないそうだ。使う必要がないのだ。

今朝の朝食の味噌汁に入っていた海草がおいしかったので、「この海草はなんですか」と聞くと、「ミミコです」と言うので、売店で一袋買った。目の前の海で採ったのを、天日干したので、日持ちも良いそうだ。朝食の時出たタコの子供の煮付けは、珍しいもので美味しかった。自家製のホッケもおいしい。ホッケはどこのスーパーでも売っているが、北海道で食べるホッケは別物のように美味しい。ペアレントのお母さんは、山菜採りに一人で山に入るそうだが、熊はそこいら中にいるが、怖いと思ったことはないと言っていた。「オーラを発しているから、熊はそれを感じ取って逃げるのよ」とあつけらかんと話している。本州の人間は、過剰に怖がっているのかも知れない。でも、怖いものは怖い。

今にも雨が降りそうな天気なので、去年寄った神威岬はパスし、積丹半島のトンネルだらけの国道229号線をひたすら南下したが、ついに雨が降ってきた。雷電海岸は長いトンネルで繋がれ、昔日の面影はない。弁慶岬で休憩したが、雨が止んで蒸し熱くなった。

国道229号線はソーランラインとも言うそうだが、交通量は少なく、海岸線にへばり付くように建っている寒村の間を抜けていく。沿線の家並みは古びて寂しい雰囲気、人が見当たらない。ニシン漁が盛んだったころは、さぞかし賑やかだったと思われるが、ニシンが去った今は見る影もなく寂れてしまった。夏でもこんなに寂しいのだから、季節風をまともに受ける冬の海岸線は、想像出来ないくらい寂しい世界となるのだろうか。自分の実家も日本海に面しているので、冬の季節風の厳しさは子供の頃から体験している。我が家は標高50mの庄内砂丘を越えて、海岸線から2kmほど内陸に入った所なので、海岸線の厳しさは体験していないが、冬の荒れた日本海が好きで見に行くことがあるが、こんな所は住めないと思った程である。

天気が悪く、走り通したので、島牧に昼過ぎに着いてしまった。「道の駅・島牧」でお昼を食べようとしたら、「ウニ丼 1 個残っているよ」と言われたので頼んだが、1000 円とは安い。ウニがタップリ乗っていたが、ご飯の量が多過ぎた。

島牧Y・Hは道の駅のすぐそばにあった。立派な建物だった。早く着きすぎたので、裏の海岸を散歩することにした。ハマナスがもう赤く熟していたのには驚いた。こんなに早かったかなと、庄内浜のハマナスを食べたりした子供の頃を思い出した。砂浜に見たこともない紫の花をつけている草があった。後でユースの人に教えられたが、ハマベンケイと言い、別名オイスターリーフと言い、葉っぱが牡蠣の味がするそうだ。

夕方になって、急に嵐になり、横殴りの雨が激しくなった。早めに到着して良かった。明日は一日天気が悪いようなので、ここにもう一泊することにした。今日は4人部屋を一人で使うことができる。

夕方遅く、登山の4人パーティの人達が到着し、一緒に夕食を食べた。このユースの食事もなかなか美味しい。地元で捕れたヤナギノマイの塩焼きは、メバルのような美味しさで、生ウニとブリ、ホタテ、イカの刺身も新鮮で、島牧の日本酒がまたいい。

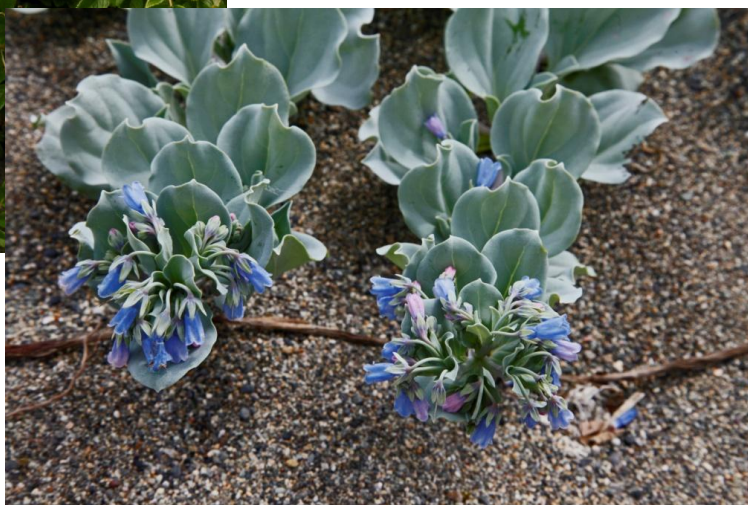
群馬から来た4人組は二組の夫婦で、北海道の山だけでなく、本州の山も登っており、鳥海山も登っていた。何と、自分の後にトムラウシも登ってきて、道南の最高峰の狩場山に明日登るために来たというから、相当なものだ。そんな話しの間、主導権は50代の女性で、男はほとんどうなずいているだけだった。「俺たちはいつも運転と荷物運びさ」と自虐的に話していたが、そんな関係のほうが良いのかも知れない。

9時からの自主ミーティングには自分一人だけで、ペアレントと二人で島牧のこと等を話し合った。昭和23年生まれで、この地でユースを初めて40年が経つと話していたが、ほとんどのユースとか、「とほ宿」の人もそうだが、北海道出身ではなく、ここのペアレントもそうだった。記憶に新しい北海道南西沖地震の時は、津波から命から逃げたものの建物は全て流されたと話していた。津波が押し寄せてきた夜、お客さんを車に乗せて山の高台に向けて走ったそうだが、林道も崖崩れで進めなくなり、ここまで津波が来たら終わりだなと覚悟を決めたことなども話してくれた。奥尻島の被害だけが大きく報道されたが、この海岸線の津波の被害も甚大だったのだ。



立派なハマナスの実

ハマベンケイの花



7月14日(火)

島牧Y・H—賀老林道—賀老高原・・賀老の滝・・賀老高原—ドラゴンウォーター—ブナ原生林
—賀老林道—ちはせ川温泉—島牧Y・H

島牧Y・H

(33km)



島牧 Y・H



賀老の滝への散策路



道南の秘境・島牧の賀老の滝



ドラゴンウォーター 中央部分より炭酸水が湧いている



賀老高原にある蓄積量日本一のブナ林



いたるところにある「クマ注意」の看板



ちはせ川温泉の露天風呂

【秘境・賀老高原の探索】

昨日からの嵐がまだ続いている。雨は小降りになったが、風が強く山はガスで覆われている。登山グループは朝早く出かけたそうだが、この天気では登山は無理だろう。ペアレントの話では、賀老高原あたりはガスが晴れているかも知れないと言っている。雨は止んだが風は相変わらず強い。賀老林道に入ると道は狭く、急坂のヘアピンカーブの連続となり、鬱蒼とした林の中を登って行く。急坂を登り切ると台地状の地形となり、今までとは明らかに違う平坦な直線道路になり、景色も開けて明るくなった。賀老の滝の入り口はすぐ分かったが、熊注意とやたら看板が目につく。それに、ここまで来る間に「黄色いリュックを見かけたら連絡してください」という看板が数カ所にあったのが気になった。広い駐車場だが、車は止まっていない。ということは、ここからの心細いような遊歩道には自分一人ということになる。熊撃退スプレーと鈴を持って歩き始めたが、遊歩道の両側は鬱蒼とした原生林が続いており、どこから熊が出てもおかしくない雰囲気だ。700mの遊歩道を歩くと、いよいよ標高差140mを一気に谷底まで降りるのだが、すごい落差で、雨に濡れたチップを敷き詰めた路面が滑りやすく、気が抜けない。滝の轟音がどんどん近づき、谷底に降り立った。幅と落差のある迫力のある道内一の大瀑布だ。滝壺まで行きたいが、この天気では危険なので止めた。写真を撮り終わって帰ろうとしたら、昨日の登山グループが降りてきた。狩場山の登山口まで行ったが、ガスが濃く、強風で危険と判断して、滝の見学に変更したと言っていた。「すごい落差ですね。帰りが大変ですね」と話していたが、長袖を脱いでも汗をかいだ。それでも、降りるより登るほうがまだマシだ。

ペアレントにドラゴンウォーターを飲むときのためにカルピスをもらってきたので、教えられたとおりに歩いて行くと、若いカップルが戻ってきた。「ドラゴンウォーター見つけましたか」と聞くと「看板はあったが湧いているところは分からなかった」と言っているので、ペアレントに教えられたことを言うと、一緒に着いてきた。確かに看板はすぐわかるが、それだけでは絶対に見つけることは不可能だ。教えられたとおりに、小沢の上流を5m遡り、大きな岩の陰を覗くと、赤茶けた岩肌の所からぷつぷつと湧き出ている。炭酸水が湧いているのである。それを見たカップルは大喜びだった。そこで、カルピスの入ったペットボトルに炭酸水を入れて男に飲ませると「サイダーだ」と感嘆の声をあげた。自分も飲むと、まさにサイダーそのものだった。女性は口にできなかった。

次に蓄積量日本一のブナ林を歩いたが、ガスで霞むブナの原生林から熊が出るのではとハラハラしながらも一通り全部歩いた。熊の気配はしても、人の気配は全く無し。原生林には乳白色のガスが立ち込め、幻想的な世界となり、写真には良かったかも知れない。帰り際、遊歩道の草刈りをしている人に「ご苦労さん」と声をかけ、黄色のリュックの件を聞いてみた。話しによると、去年、筍採りの人が行方不明になり、未だ発見されないのだが、その時背負っていたのが黄色のリュックらしい。ここは携帯も圏外だ。

帰りに「ちはせ川温泉」に寄ったが、素朴な雰囲気温泉で貸し切りだった。露天風呂に入っていると、目の前の密林から熊が入ってくるのではと思ったりした。赤く鉄分の多い泉質で、湯加減が温めで丁度良い。温泉の旦那は「入ってて」と言って何処かへ行ったまま帰ってこない。テレビは付けっぱなしだし、帳場も開けっ放しだ。1時間くらいいたが帰ってこないで、1000円置いて帰ろうとしたら戻ってきて「こんなにもらえない」と500円のおつりを渡した。何とも不用心と言おうか、おおらかな所だ。

ユースの前のガソリンスタンドで給油しようとしたら、ハイオクは無いと言われたが、そんなこともあるのだ。道の駅の定休日なんて聞いたことがないが、島牧の道の駅は定休日があった。コーヒーを飲もうと思ったが諦めた。

今日も早めにユースに戻り、休養とした。夕方、大阪からの60代の一人旅の人と同室になる。先ほどまで、木々を揺すぶるように吹いていた風がピタッと止んだ。そして、やがて逆方向の海風となり、冷たい風となった。前線が通過したようだ。明日は天気が良くなる。

夜のミーティングには今日も自分一人で、ペアレントから島牧の開拓の話を聞いた。今日行った賀老高原は国策のもとに行われた開拓地で、多いときは 300 人を超す人口があったそうだ。黒松内から寿都まで森林軌道に乗り、島牧まで 2 日かけて歩き、そこから山道を15km歩いて入植し、厳しい生活を強いられたと話している。原生林を人力で開拓し、農業を行ったが、高原を吹く海風で冷害となり、思うように農業は出来なくなって離農し、今は、ここに昔集落があったという痕跡は全く無い。強いて言うならば、台地地形にある開けた道路に、当時を忍ぶことが出来るかも知れない。明日、走ろうと思っている月越高原も同じような開拓の歴史があるところのようだ。黄色のリュックの話は当然知っていて、隣町の寿都のお寺のお坊さんと言っていた。地理には詳しいハズだし、絨毯作戦で可能な所は隈無く搜したが、不思議なくらい見つからないと言っていた。ひょっとしたら、自作自演の蒸発かとも囁かれているような気配だった。

7 月 15 日(水)

島牧Y・H—R229—本目—D523—黒松内駅—D523—月越高原—R229—瀬棚

マリノ倶楽部

(165km)



月越高原

標高日本一の茂津多岬灯台



R 2 2 9 沿線の海岸



ホッケを干しているところ モーターで回転している



瀬棚海岸

朝、起きてみると昨日とはうって変わって寒くなり、スキズを着用した。大阪からの人も山が好きとみえ、恵山、駒ヶ岳に登ってきたと話していた。両方とも 1 時間ぐらいで登れたと話しているので、自分も登ってみようと思った。ニセコに行く予定だが何処が良いかと聞くので、岩内からのニセコパノラマラインと神仙沼、五色温泉、鯉川温泉の情報提供をした。島牧の町のスタンドで燃料を入れ、月越高原を越えて黒松内まで走り、Uターンして同じ道を戻った。月越高原は原生林の賀老高原と違い、樹木も育たないような荒れ地の原野で、ここに開拓地があったとはとても想像できない。

瀬棚までの海岸線は、ようやく青い海が望まれるように天気も回復したが、風は相変わらず強く、海は時化している。国道から右折してかなりの急勾配の細い道を登って、日本一高いという茂津多岬灯台に寄り道をした。灯台の入り口に制服姿の人が3人ほどいたので、何かあるのかと聞いたら、これから小学生が見学に来るための準備をしているところだった。普段は中に入れないが、今日は特別に中に入って上まで登っても良いと言われ、登ったが、当然のごとく海しか見えなかった。確かに、海面は遥か下のほうに見えた。

時々止まっては写真を撮りながらノンビリとバイクを走らせた。浜のお母さん達でやっている食堂に入ってホットケ定食を食べたが、脂ののっている美味しいホットケだった。すぐ脇ではホットケを干しているところだったが、モーターで回転させながら一様に乾くようにしていた。

【荻野吟子】

瀬棚から奥尻島に行こうと思っていたが、海が時化ているのを見て止めた。行っても帰ってこられなくなることもあるからだ。数年前、焼尻島に行ったのはよかったが、時化でフェリーが欠航し、帰れなかったのだ。その時初めて宿に時化料金というのがあることを知った。確か半額だったかな。

時間潰しに、普段あまり行かない瀬棚郷土館に行ってみた。ここには、日本で初めての女性医師となった荻野吟子の展示をしていた。荻野吟子なるすばらしい人物を初めて知った。日本人女性初の国家資格を持った医師としてだけでなく、女性運動家として女性の人権を確立させた功績も大きい。それにしても、その生い立ちをみると、まさに波瀾万丈の生き方をしていた。職員の女性が、今日の入場者は一人ですと暇そうに話していた。そんなわけだから、質問すると、待ってましたとばかり対応してくれた。そして、「荻野吟子は、生まれは埼玉なんですよ…」と、瀬棚ではないことを気にしている話し方だった。なんとものだかな郷土館だった。

小さな町なので、民宿のマリン倶楽部は、ナビもないけれど簡単に見つかった。近くの町営温泉に入ってから食事をしたが、漁師がやっている民宿ならではの料理が出てきた。



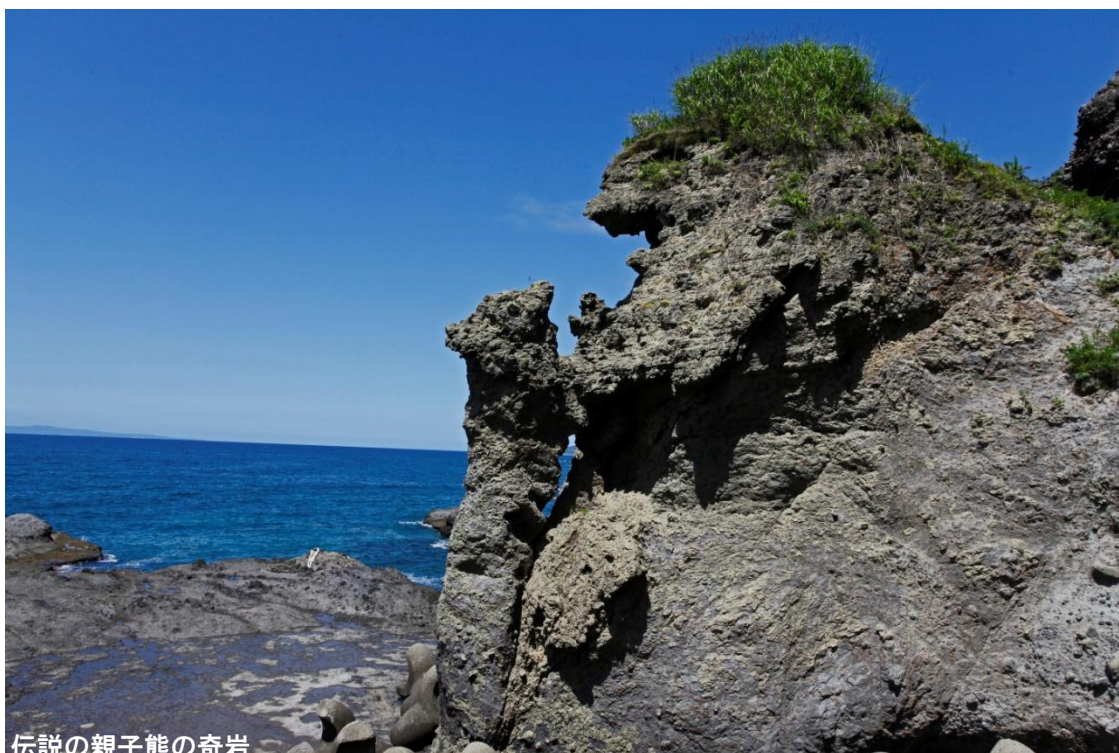
荻野吟子

7月16日(木)

瀬棚・マリン倶楽部—R229—(檜山国道)—江差—R228—松前 矢野旅館 (139km)



瀬棚のシンボル三本杉岩



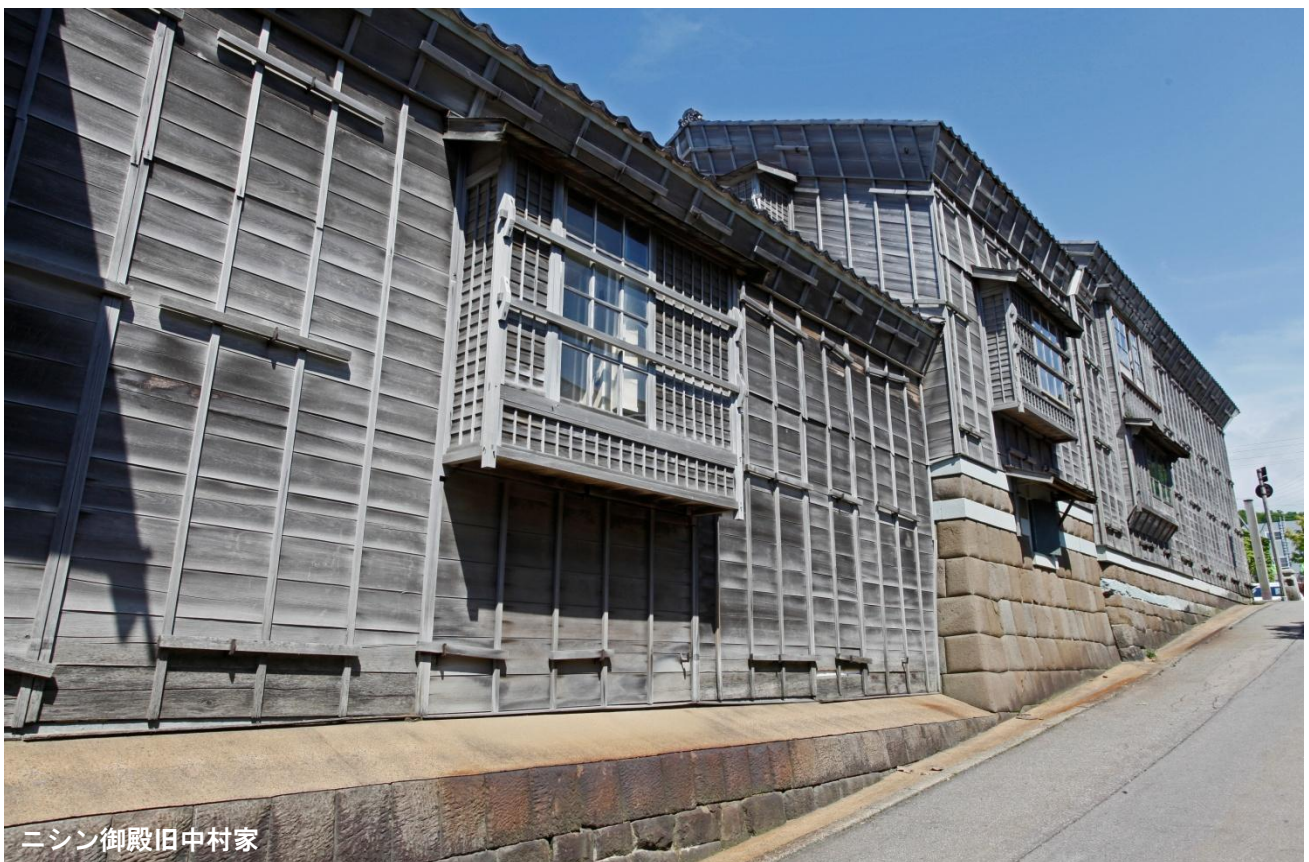
伝説の親子熊の奇岩



瀬棚の海岸より奥尻島



全国大会優勝者の江差追分





江差の町並み



古い町並みと似合うバイク



大島遠景 標高731mもある

【ニシンに翻弄された江差】

今日は朝から快晴で、海岸線を快適な走行ができる。瀬棚のシンボルである三本杉岩の写真を撮ろうとしたが、手前のテトラポットが邪魔だ。海岸にへばり付くように点在する集落を縫うように道は続いている。今日の目的地は松前だが、その前に江差が気になる。北海道の文化は、北前船の寄港地江差と松前から始まったと言っても過言では無い。追分会館で歴代の江差追分の優勝者の生の追分を聴くチャンスに恵まれた。大きなホールに客が4人しかいなかったが、艶のある、張りのある声で歌う江差追分は心に響くものがあった。歌い終わってから、壇上から降りてきて、たった4人の聴衆に丁寧に挨拶してくれた。江差もニシン漁で栄えた町で、ニシン漁盛んな時の建造物が随分と残っており、その保存もしっかりしているが、肝心の人間が少ない。数日の漁で1年分を稼いだ時代の遺構群が町の随所に残っている。それ故か、未だニシン漁の盛んな頃の夢を、空しく追いかけているような印象を感じる。年に一度の江差の祭り、「姥神大神宮祭典」には、町を出て行った人も戻ってきて、普段の何倍もの人で賑わうそうだ。その時に使用される山車が追分記念館に展示されているが、京都の人形師に作らせた金に糸目を付けない華麗なものである。

松前に向けて海岸線を走っていたら、洋上に島影が見えるようになった。自分の頭の中にはこんな所に島はないという思いと、山のような特異な景観を持つ島に強く惹かれたので、バイクを止めて地図を確認したところ、大島であることが分かった。標高731mの島全体が山である。

松前は、30代の頃、松前出身の同僚がいたので遊びに行き、以来だから40年ぶりとなるが、記憶には一切残っていない。ただ、今日泊まる旅館はその当時からあったと思われるが、全く面影はない。



7月17日(金)

松前—R228—函館—R278—D635—恵山(618m)—D231—R278—鹿部温泉
鹿の湯旅館 (193km)



恵山



霊山・恵山

【霊山・恵山に登る】

松前を出発する時、朝の通勤時間帯のはずなのに、昔を偲ばせる町並みを折角保存しているのにもかかわらず、肝心の人がいないのである。朝日を浴びて、陰影のコントラストがきつい景観がなおさら過疎を強調しているようだ。松前からの海岸線は昔からの道路で、津軽半島を右手に眺めながらの走行だが、風はあるものの天気は良く、Vツインのエンジンは頼もしく快調な鼓動を地面に叩きつけながら走った。丁度干潮の時間帯で、海岸線は特異な景観をみせており、磯遊びをしている人達が多く見られる。函館山を木古内側から見ると、こんな所に島があったかと思ふほどの迫力だった。函館で昼飯と思っていたが、適当な所を捜しているうちにアツという間に通り抜けてしまったので、コンビニで弁当を買い、海岸の景色の良いところで食べた。寂れた感じの国道278号線をノンビリと走っていると、前方に赤茶けた山が見えてきた。恵山だ。なぜか登山意欲をそそる山なので、急坂のヘアピンロードをシフトダウンとシフトアップの練習のように、アクセルコントロールをしながら高度を上げ、行き止まりの駐車場に着いた。ここで、ライダースタイルから登山スタイルに変身し、植物の見当たらない岩だけの山に登った。自分の登山哲学からすれば、緑のない山は登るに値しないのだが、この山には何かがある。この山は活火山で、今でも噴煙を上げている山で、御嶽山のことを思うと自然と足が速まった。途中、地熱発電の調査をしている人がいたので、この山の危険性を聞いたら、「多聞大丈夫でしょう」とあまり根拠のないような返事が返ってきた。そして、この殺伐とした光景と途中の石仏のことを聞くと「下北の恐山と対の山が恵山で、霊山だ」と話していた。賽の河原が広がり、石仏が至るところに見受けられる。頂上からの景観は、青森側は台風の影響を受けて雲海が続いているが、北海道側は、襟裳岬、羊蹄山、駒ヶ岳が一望の下だ。往復2時間の登山で汗をかいたので、出来るだけ早く今日の宿の温泉に入りたくて先を急いだ。鹿部温泉は昔ながらの温泉旅館だった。随分前に泊まりたいと思った温泉だ。小さな鹿部漁港が目の前の温泉で、温めの露天風呂はゆっくりと浸ることができた。



盛んに噴煙をあげている



この山には奇岩が多い



天然の弁柄（酸化第二鉄）が露出している

7月18日(土)

鹿部温泉・鹿部間欠泉—R278—D43—D338—大沼公園—D338—大沼キャンプ場
—D338—R5—長万部—R37—室蘭 室蘭Y・H (200km)



鹿部温泉間欠泉

鹿部温泉には日本三大間欠泉の一つ、鹿部温泉間欠泉があるので、バイクを宿に置いたまま歩いて行ってみた。何と、間欠泉の真上に丸い蓋のようなものが付いている。看板には、風がある場合は周囲に飛び散らないように蓋をします、と書いてあるが、風など無いのに蓋はされたままで、興醒めもいいとこだ。係の人に「今日は風が無いのに蓋をしているのはみっともないよ」と言うと、「本当は、周囲の人達からの苦情対策なのです」とバツの悪そうな顔で話してくれた。この間欠泉は勢いよく飛びすぎて周囲の家屋や走行中の車にもかかってしまうそうだ。単なる水と違って、温泉水だから、かかった場合にいろいろな弊害が生ずるみたいだ。勢いよく吹き上がるのを見たいものだし、折角の珍しい自然現象が勿体ない。

駒ヶ岳に登ろうと思っていたが、大沼公園からも全く見えないくらいガスに覆われていたのでやめた。懐かしい大沼公園の湖畔を走り、生後半年の長女を連れてキャンプをした大沼キャンプ場に寄ってみたが、当時と変わらず静かな湖畔のキャンプ場だった。長女を夕方近くまで水遊びをさせたおかげで、夜に高熱をだし、函館の病院に連れていたら、「こんな子供を北海道まで連れてくるなんて非常識だ」と医者に怒られた。翌年、同じところでキャンプ中、ものすごい台風の襲撃を受け、夜中に死にものぐるいでテントを撤収し、車に避難したのを思い出した。5号線沿いの森は、イカめしが名物なので、今晚の夕食用に買った。この辺りから雨が降り出してきた。5号線は北海道の大動脈なので、車の交通量が本州並に多く、雨が降っていることもあり、のんびり景色を眺める余裕は無くなった。長万部のコンビニで簡単なお昼をとり、かなり強くなった雨の中を国道 37 号線に分かれた。途端に交通量は皆無に近いくらい少なくなり、激しい雨でもほとんど苦にならず、雨に煙る直線道路を、Vツインのエンジンを思いっきり轟かせてひた走った。右手に噴火湾を眺めながらの直線道路はしばらく続き、今度はアップダウンの激しい道になり、礼文華峠を越えた。雨の日のライダーは、レインウエアを脱いだりするのが面倒なので、寄り道をせずに走ってしまうため、目的地に早く到着してしまう。

【室蘭 Y・H はキリの中だった】

今日の宿は初めて行く室蘭 Y・H だが、ここは夕食が出ないので、買い出しをしなければならぬ。室蘭のイオンに寄ってみたが、海の傍なのに鮮魚がない。刺身は諦めて、一つしか残っていなかったアナゴ丼と餃子とエダマメ、それに酒を買って、街外れにあるユースへ向かった。道から少し入った高台に白い大きな建物が目に入ってきた。そこが室蘭 Y・H だったが、入るのをためらうほどの異様な雰囲気のある建物だった。最近のユースはこじんまりとした建物が多いのだが、ここはバカでかく、かなり古い。海を眺められる高台という立地条件は最高なので、一頃はかなりの旅人で賑わって、この大きな建物でも一杯だったのかも知れない。しかし、その後、ユース離れに拍車がかかり、客が減ったにもかかわらず、対策を講じないままに、メンテナンスもしていないから「何かが出そうな」雰囲気になってしまった。濡れた雨具を干すためのハンガーを持ってきたり、親切にしてくれたりするが、生気のない表情のペアレントが一人に対応しているのが気の毒なくらいだった。雨に濡れて冷えた体を温めようと風呂場の扉を開けた瞬間、異臭が強く後ずさりをしたが、温まりたい一心で入った。風呂場だけで無く、建物全体の掃除が行き届いていないのだ。シャワーで綺麗に流してからあがった。3 人組のライダーもズブ濡れになって到着した。自分の部屋にも仕事で来た人が入ってきた。雰囲気が雰囲気なので会話は続かない。六畳間ほどの談話室で食事をすることにしたが、テレビと電子レンジがあったので助かった。今時のユースは客離れを防ぐため、あの手この手とアイディアを出して気配りをしているが、ここは旧態依然としたままで、ユースの精神もなく、ただ部屋を貸しているだけだ。しかし、このようなところを好む人もいるのかも知れない。

朝食付きなので、食堂に行ってみると、例のペアレントが調理の格好をして用意してくれた。目玉焼きに干涸らびたようなシシャモ二本、そしてお新香と味噌汁。お見事としか言いようがない。

7月19日(日)

室蘭Y・H—D919—チキウ岬手前—D919—R36—白老(アイヌ民族博物館)—苦小牧—D259—R235—むかわ—新冠—D209—ふかふか亭 ふかふか亭 (160km)

チキウ岬への道は狭い曲がりくねった道を濃霧で全く見えない中を登っていったが、岬直前の展望ステージでほとんど前方が見えないくらいのガスになって、バイクで走るには危険と判断し、引き返すことにした。



アイヌ模様には平和を願う丸みのある文様と魔除けと戦いの意味の尖った文様がある



「イオマンテの夜」を踊るアイヌの人達

【白老 アイヌ民族博物館】

小雨降る中、白老アイヌ民族博物館に寄った。どうせ観光客向けのところだろうが、天気が悪いので走ってばかりいてもつまらないので寄ってみた。資料館は、アイヌの歴史と文化について詳しくわかりやすく展示されてあった。自分がアイヌに対してあまりにも知らなすぎるし、日本人でも、歴史の教科書でも知ることができなかったし、ほとんどわかっていないと思う。現在、世界各地で民族紛争が絶えないが、日本でもあったのだ。しかし、アイヌは和人に対して寛容で排他的ではなく、交流を受け入れてきた。しかし、和人の中には、人間の欲の塊のような人がアイヌに圧力をかけるようになり、争いも起きた。コシャマインの戦い、シャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いなどが主な戦いだが、いずれも和人の権力的、支配的思想がもとで争いは起きている。しかし、結局は「松前の言うとおりにする」と誓うことを強制されたのです。救いは、各国で起きているような民族の大量虐殺は無かったことである。しかし、明治政府は、北海道を日本の領土と認めさせるために、先住民族のアイヌ文化を否定してきた。従って、学校教育の中で、特に社会科などの歴史において、詳しく記述されていないし、だからこそ一般的に関心も持たれてこなかった。アイヌ人でありながらアイヌ人であることを隠して生きてきた事実は、差別があったからに他ならない。最近になって、アイヌ民族をはじめとした人達が「アイヌ文化」について堂々と主張し始めてきた。関東から北の古代の日本を語るに当たって、アイヌ文化をもっと知る必要があると痛切に感じた。古代のアイヌの暮らし等を想像しながら見て回ったら2時間も経っていた。

【コシャマインの戦い】

800 年から400年前、アイヌの人達はだれからも命令されることもなく、物々交換による自由貿易をしていた。その頃、和人が北海道南部に住み着き、サケやコンブを求めてヨイチやムカワあたりまで拡大してきた。そんな状況の時、アイヌの少年が和人に殺される事件が起きた。その事件をきっかけにコシャマインをリーダーとするアイヌ人と和人との間で戦いが始まり、アイヌ人が勝った。この戦いの後、数十年の間、和人の住む所は松前と上の国だけになった。

【シャクシャインの戦い】

1630 年頃、松前氏の許可をもらった人達がアイヌと物々交換をしての交易で儲けていった。次第に儲けを大きくしようと交易条件を和人の有利になるように変えていった。このことが重なり、アイヌの不満が大きくなり、1669年、シャクシャインをリーダーとするアイヌの人達の戦いが始まった。結局アイヌ人が負け、「戦いをやめる話し合いにこないか」とシャクシャインを呼び出し、だまし討ちにして、「松前の言うとおりにする」と誓うことを強制して支配するようになった。

【クナシリ・メナシ】の戦い

1771 年、アイヌ人と南下してきたロシア人とウルップ島で戦いになった。その結果、ロシア人はウルップ島から南下することをやめた。ところが今度は和人の商人がやって来て、アイヌの人達に魚粕を作る仕事をさせたが、過酷な仕事のわりには賃金がほんの僅かで、「言うことを聞かなければ殺す」と脅して強制した。追い詰められたクナシリ・メナシのアイヌの人達は立ち上がり、1789年、和人71人を殺した。アイヌの長老は戦いをやめるように説得し、アイヌの人達もそれに従った。にもかかわらず、松前の侍が強い態度でのぞみ、37 人のアイヌの人を死刑にした。

これらのことを知るにあたって、日本人の血には欲に塗れた支配願望があり、結局、太平洋戦争における植民地侵略へと突き進む結果となった。それに比べて、アイヌ民族の寛容さを見習いたいものだ。

博物館の隣のアイヌ人のチセ(家)ではアイヌの人達による伝統的な歌と踊りが実演されていた。それにはあまり興味がなかったが、踊りが終わった後、失礼は承知で「あなた方はアイヌ人ですか」と質問したら、「そうでもない人もありますが、私はアイヌ人です」と答えてくれた。彼女は「イオマンテの夜」を踊ったメンバーの中で、一番若くて魅力的だった。

今日の宿は、新冠のサラブレッド銀座を通り過ぎた高台にあった。すでに何人かの先客がいたが、案内された部屋には自分一人だった。オーナーの車で近くの温泉に案内された。「とほ宿」では、近くに温泉がある場合は大抵そこに連れて行ってくれるが、旅人もそのほうが助かる。広大な敷地にあるホテルの温泉だった。

今晚の客は、幌尻岳登山の二組の夫婦、スペイン製トライアルバイクの女性、東京から車で一人旅の女性で、一緒に食事をとりながら情報交換をした。トライアルバイクの女性は「さろまにあん」の常連ということがわかり、お互いに「さろまにあん」に電話をし、自分は今年行けないからと謝った。明日は、千歳川か支笏湖で釣りをしようと話したところ、支笏湖のとほ宿をオーナーに紹介された。

7月20日(月)

ふかふか亭—D209—R235—苫小牧—R36—千歳—D16—R453—支笏湖—D141
—樽前山駐車場—・樽前山(1041m)—・樽前山駐車場—支笏湖 ラップランド (135km)



樽前山のイワブクロの群生



天然記念物の樽前山溶岩円頂丘（溶岩ドーム）



支笏湖の日没

今日の目的地は近いので、ゆっくりとふかふか亭を出発した。この朝のゆとりが心地よい。今日は樽前山の登山と千歳川の釣りを目的に、寄り道しないで走り続けた。地図で見ると、千歳川と道道16号線は平行しているように見えるが、川は見えない。地図上では川と道路が最短と思われるパーキングのある広場にバイクを置いて、しばらく林の中を歩いてみたが、川までは結構ありそうなのと、日差しが強くなり暑いので途中で引き返した。バイクまで戻ってから昼飯を食べ、樽前山登山に集中した。

樽前山駐車場までは、3km弱のダートを走らなければならないようだ。ダート走行には慣れているものの、どんなダートなのか、実際に見てみないと何とも言えない。大きなゲートがあり、駐車場が満車になると閉めるようだ。ゲートからすぐダートで、一番走りたくない深砂利だった。轍の部分だけ締まっていて、それ以外の部分は深砂利で、側溝に斜めに傾いているので、バランスを崩すと側溝に簡単にはまってしまう。対向車が来ないことを祈りながら急勾配のダートを登って行ったら、上から乗用車が降りてきた。轍を抜けたら、この大型バイクはコントロールを失うので、轍の上に止まって、乗用車がそれってくれるのを待つしかない。それを数度繰り返しながら、最後の急勾配で、ソロバン道路のヘアピンカーブは止まったら終わりという状況でやっと駐車場に着いた。駐車場は車で満車だったので、バイクは樽前山の案内板の下の隅っこに止めるように指示されたが、こんな傾斜地にバイクを止める場合は、出る時のことを考えて止めないと大変なことになる。それにしても、この車の多さには驚いた。こんなに樽前山に登っている人達がいるのかと信じがたいほどだった。今日は海の日なのに、山に来たようだ。1時間で登れる気安さのためだろうか。

【樽前山登山】

ライダーから登山者に変身し、雨具と非常食と水をザックに入れ、展望の全くきかない林の中を登っていると、後ろから、10代と思われる3人組の女の子が追い越していった。「元気だね～」と声をかけると、キャハハと笑いながらグングン登って行った。しばらく行くと、さっきの3人組が座り込んでいた。自分の孫のような女の子達は、オーバーペースのような表情をして疲れていた。ここで、おじさんの悪い癖が出て、「この花なんて言うか知っている？」と声をかけると、「見たこともない」と言うので「イワブクロと言うんだよ」と教え、「ホタルブクロという花もあって、この袋状になっているところに蜜が入って光ると、なかなか風情があるんだよ」と、もっともらしく言うと「わかりやすい」と喜んでた。この山は、全山イワブクロを敷き詰めたように、花の最盛期だった。時々ガスが流れてきて、視界が悪くなるので、早く頂上に登って、天然記念物の「樽前山溶岩円頂丘(溶岩ドーム)」を見ようと急いだ。フェリーから見ても異様な姿の溶岩ドームを、間近に見ることができた。噴煙が上がり、立ち入り禁止になっているので、東岳から見ただけだが、いつ噴火するかわからないので早々に下山を始めた。やっと笑顔を取り戻した3人組の女の子達が登ってきた。このご時世に、女の子3人だけで山に登ろうと考える事に意義がある。たかだか1時間の登りとは言え、それなりに疲れるし辛いハズだが、明るく楽しそうだった。こんな女の子達もいることに、ホッとしたような気分になった。ふと気がついたのだが、駐車場の車の数にしては、山で見かける人が少ない。別の散策路でもあるのだろうか。

今日の宿は、支笏湖湖畔のログハウスの「とほ宿」だ。客は東京から来た75歳のライダーと二人だけで、夕食はジンギスカン料理をオーナー夫妻と4人で食べた。東京からの人は70歳からバイクに乗り始めて、今年初めて北海道に来たと言っていたが、何か危なっかしいような人で、400ccのドラッグスターでよく北海道まで来たものだと思った。この自称不動産屋の社長は飲み過ぎて酔っ払い、人に酒を飲ませたがる悪い癖がある。オーナーは、この宿を始めて25年になることとかを話してくれたが、少々周波数が合わない。東京の社長はますます酔っ払ってきたので、部屋に引き上げることにした。

7月21日(火)

支笏湖ラップランド(9:00)—R453—D16—千歳川—D16—千歳—R36—D259—苫小牧
—苫小牧港フェリーターミナル(15:00)(19:00)~~太平洋フェリー「きたかみ」~~ (54km)

ログハウスの「ラップランド」



支笏湖にフライを振る



フライフィッシングの達人



千歳川のフライフィッシング

5 時少し前に起きて、湖岸まで歩いて 5 分もかからない所でフライロッドを振ることにした。周りには障害物が無いので、思いっきり振ることができる。しかし、肝心のライズは全く見られず、湖面は鏡のように静かだ。この環境でフライを振るだけでも気持ちが良いと自分に言い聞かせ、腰近くまで立ち込んで振った。支笏湖は透明度が高いので、底石が見えても水深は意外とあるようだ。支笏湖は遊泳禁止の湖だが、この冷たい水で泳いだら心臓麻痺になる。しばらく振り続けたが、魚の反応は全く無く、フライの振り方の練習をしているようなものだ。それでも気分は良かったが疲れてきたのと、体が冷えてきたのでやめることにした。引き上げる時、湖岸の別の宿の人が、「水槽みせるから」と呼んでいる。その大きな水槽には、アメマス、ヒメマス、エゾイワナ、ヤマメが泳いでいた。全部自分が釣ったのだと言いながら、「この時期、魚は湖岸から離れて沖にいるから、船で釣らないと釣りにならないよ」と話してくれた。

【フライフィッシングの達人との出会い】

ならば、千歳川で釣ろうとバイクを走らせながら、川への入り口を捜したが全く見つけられなかったが、川と急接近しているところを走りながら横目で見たとき、瞬時に「釣れそうだ！」と直感し、バイクをUターンさせた。フライロッドを持って川に降りようとしたら、草原で蛇の出迎えをうけた。流れの手前からフライを流してみたが、反応無し。流芯の向こう側が良さそうだが、自分の技術で飛ばすことができるだろうか。何回かに 1 回は飛んでくれたがフライは流れ去るばかりだった。その時、道路から見ていた人が、自分のあまりにもの下手さ加減を見かねて、「フライを教えてやるよ」と声をかけてきた。最初は随分おせっかいな人もいるもんだと思ったが、ボランティアでフライフィッシングの普及活動をしている現地の人だった。案内された所は千歳川の河畔に作られたフライフィッシングの練習場だった。全部自分で作ったと言っていた。そこで、基本的な、かつ、実践的なフライの流し方と振り方を丁寧に教えてもらった。なかなか分かりやすい教え方で、短時間で少しは飛ばせるようになった。特に、後ろにあまり飛ばさなくても前方に飛ばすことができるようなテクニックを教えてもらったのはありがたかった。1 時間かけて、二つのパターンを教わった。この方は本田さんといって、手本に振り方を何回も実演してくれたが、フライが生き物のように意のままに飛んで行く様は芸術的でもあった。その後、「コーヒーブレイクにしよう」と案内されたのは、川のすぐ傍にある事務所のような所だったが、この本田さんは設計家で、その仕事場だった。おいしいコーヒーを飲みながら、フライのことは勿論、北海道の歴史、文化などにも話しは及んだ。この人のフライへの取り組み方は、ただ釣れれば良いというようなものではなく、また、ただ遠くへ飛ばせば良いというようなものでもなく、フライを目標地点に着水させて、流して、そしてまた振り込むという一連の動作の流れに、無駄がない理想的な動きを追い求めているこだわりを感じた。そこには、設計家という「もの作り」の業のようなものを感じた。その部分は自分も同じなので良く分かる。コーヒーブレイクの後も指導してもらい、最後は、一人で最初の場所に戻って実践的に釣ってみたが、魚の反応はなかった。しかし、旅の最後に、本田さんとの思いがけない出会いがあり、短時間ではあったが充実した時間を持つことができ、旅のフィナーレに相応しかった。

後はフェリーターミナルに行くだけだが、バイクを走らせているだけで至福の時間に感じられるような気分になり、無事に苫小牧に着くようにと気を引き締めて走った。ところが、フェリーターミナルまで 5 km のところで急に雨が降り出し、本降りになってしまった。

コンビニで雨具を着ながら、釣りに夢中になって昼飯を食べていないことに気がつき、おにぎりを買って食べた。雨は止みそうにもなかったので、走り出したが、交通量の多い国道 36 号線の雨中走行は神経を使った。フェリーターミナルに早めに着いたが、既に相当数のバイクが到着していた。皆、雨天のために早めに着いてしまったのである。

7 月 22 日(水)

～太平洋フェリー「きたかみ」～仙台港フェリーターミナル～東部南部自動車道 ～自宅 (25km)

北海道の気候に慣れた体は、仙台港に上陸するや、湿気の多さに閉口した。あげくの果て、普段は混まない道路が渋滞していて、蒸し暑さとの挟み撃ちにあってしまった。

家に着くやいなや、とかちは待っていた。シッポはちぎれそうなくらいに振りながら、興奮のあまりに呼吸がまともにできず、過呼吸のような症状で体をぶつけるようにしてじゃれてきた。しばらくは興奮状態が続いた。どんなにか待っていたのが伝わってくる仕草だった。早速、散歩に連れて行ったのは言うまでもない。

【あとがき】

年々、北海道の天候が不安定になってくる。しかし、そんな中で、縦走が計画通りにできたことは幸運だったと言える。そして、登山の内容が今までにないくらい充実していたので尚更である。心配していた体力もまだ大丈夫という確信を得ることができた。不思議なことに、かなりハードな行程であっても、辛いと思う度合いが年々小さくなってきたような気がする。それは、こんなことがまだできるのだという喜びのほうの方が優っているからだと思う。どんなに辛い急坂の上りでも、右、左と交互に足を前に出し続ければ、そのうち着くだろうと悟ることができると、苦しさは薄らいで周りを見る余裕すら出てくる。山は何度登っても飽きない。自然の絶対的大きさに畏敬の念を抱き、自分の非力さに謙虚にならざるを得ないし、その大きさをどのくらい受け止めることができるかで、自分の器の大きさにも影響してくる。なにせ、言葉の遊びによるものではなく、死と隣り合わせの世界でのやり取りだからである。

北海道の文化の先駆けの道南を回って見たが、東北の延長のような感じを受けたのは否めない。海岸線だけ走っているとは分からない部分もあると思って一部分内陸部にも入ってみたが、道北、道東の農業と比べると、TPP の風で吹っ飛ぶような農業である。

行く前から興味を持っていた江差は、懐古主義の旅人はある意味喜ぶかもしれないが、地域全体から発するエネルギーは感じられない。通りすがりの旅人の表面的見方だが、絶対的に人が少な過ぎる。東京のように多過ぎるのは論外だが、ある程度の密度がないと勢いが出ないのである。

来年も続けたいが、畑を真剣にやろうとすれば、3 週間のブランクはかなりのダメージを受けるので、その当たりの加減が問題だが、もう既に、来年の大雪の登山コースを考えてしまう。

道内走行距離 2085km

総走行距離 2134km

